



森鷗外著

高瀬舟
山椒大夫

A4用紙で印刷すると、実寸サイズをご確認いただけます。
※倍率100%の場合

目次

高瀬舟	5
魚玄機	25
じいさんばあさん	51
寒山拾得	65
堺事件	81
山椒大夫	123

高瀬舟

たかせぶね

高瀬舟は京都の高瀬川を上下する小舟である。徳川時代に京都の罪人が遠島を申し渡されると、本人の親類が牢屋敷へ呼び出されて、そこで暇乞をすることを許された。それから罪人は高瀬舟に載せられて、大阪へ廻されることであつた。それを護送するのは、京都町奉行の配下にいる同心で、此同心は罪人の親類の中で、主立つた一人を大阪まで同船させることを許す慣例であつた。これは上へ通つた事ではないが、所謂大目に見るのであつた。黙許であつた。

当時遠島を申し渡された罪人は、勿論重い科を犯したものと認められた人ではあるが、決して盗をするために、人を殺し火を放つたと云うような、獍悪な人物が多数を占めていたわけではない。高瀬舟に乗る罪人の過半は、所謂心得違のために、想わぬ科を犯した人であつた。有り触れた例を挙げて見れば、当時相対死と云つた情死を謀つて、相手の女を殺して、自分だけ活き残つた男と云うような類である。

そう云う罪人を載せて、入相の鐘の鳴る頃に漕ぎ出された高瀬舟は、黒ずんだ京都の町の家々を兩岸に見つ、東へ走つて、加茂川を横ぎつて下るのであつた。此舟の中で、罪人と其親類の者とは夜どおし身の上を語り合う。いつもいつも悔やんでも還らぬ繰言である。護送の役をする同心は、傍でそれを聞いて、罪人を出した親戚眷族の悲惨な境遇を細かに知ることが出来た。所詮町奉行所の白洲で、表向の口供を聞いたり、役所の机の上で、口書を読んだりする役人の夢にも窺うことの出来ぬ境遇である。

同心を勤める人にも、種々の性質があるから、此時只うるさいと思つて、耳を掩いたく思う冷淡な同心があるかと思えば、又しみじみと人の哀を身に引き受けて、役柄ゆえ気色には見せぬながら、無言の中に私に胸を痛める同心もあつた。場合によつて非常に悲惨な境遇に陥つた罪人と其親類とを、特に心弱い、涙脆い同心が宰領して行くことになる、其同心は不覚の涙を禁じ得ぬのであつた。

そこで高瀬舟の護送は、町奉行所の同心仲間、不快な職務として嫌われていた。

いつの頃であつたか。多分江戸で白河楽翁侯が政柄を執つていた寛政の頃でもあつ

ただろう。智恩院ちおんいんの桜が入相の鐘に散る春ゆづるの夕ゆふべに、これまで類のない、珍らしい罪人が高瀬舟に載せられた。

それは名を喜助きすけといつて、三十歳ばかりになる、住所不定ふじょうの男である。固もとより牢屋敷に呼び出されるような親類はないので、舟にも只一人で乗った。

護送を命ぜられて、一しよに舟に乗り込んだ同心羽田庄兵衛はねだしょうべえは、只喜助が弟殺しの罪人だということだけを聞いていた。さて牢屋敷から棧橋まで連れて来る間、この瘦肉やせじしの、色の蒼白あおしろい喜助の様子を見るに、いかにも神妙しんびょうに、いかにもおとなしく、自分をば公儀こうぎの役人として敬つて、何事につけても逆さかわぬようにしている。しかもそれが、罪人の間に往々見受けるような、温順を装つて権勢に媚こびる態度ではない。

庄兵衛は不思議に思った。そして舟に乗つてからも、単に役目の表で見張つていられるばかりでなく、絶えず喜助の挙動に、細かい注意をしていた。

其日は暮方から風が歇やんで、空一面を蔽おほつた薄い雲が、月の輪廓をかすませ、ようよう近寄つて来る夏の温あたたかさが、兩岸の土からも、川床の土からも、霽もやになつて立ち昇るか

と思われる夜であつた。下京しもぎょうの町を離れて、加茂川を横ぎつた頃からは、あたりがひっそりとして、只舳へに割くかれる水のささやきを聞くのみである。

夜舟よふねで寝ることは、罪人にも許されているのに、喜助は横になろうともせず、雲の濃淡に従つて、光の増したり減じたりする月を仰いで、黙つている。其額ひたいは晴やかで目には微かすかなかがやきがある。

庄兵衛はまともには見ていぬが、始終喜助の顔から目を離さずにいる。そして不思議だ、不思議だと、心の内で繰り返している。それは喜助の顔が縦から見ても、横から見ても、いかにも楽しそうで、若し役人に対する気兼きがねがなかったなら、口笛を吹きはじめるとか、鼻歌を歌い出すとかしそうに思われたからである。

庄兵衛は心の内に思った。これまで此高瀬舟の宰領をしたことは幾度いくたひだか知れない。しかし載せて行く罪人は、いつも殆ど同じように、目も当てられぬ気の毒な様子をしていた。それに此男はどうしたのだらう。遊山船ゆざんぶねにでも乗つたような顔をしている。罪は弟を殺したのだそうだが、よしや其弟が悪い奴で、それをどんな行掛ゆきがりになつて殺した

にせよ、人の情として好い心持はせぬ筈である。この色の蒼い瘦男が、その人の情というものが全く欠けている程の、世にも稀な悪人であろうか。どうもそうは思われない。ひよつと気でも狂っているのではあるまいか。いやいや。それにしては何一つ辻褃の合わぬ言語や挙動がない。此男はどうしたのだろう。庄兵衛がためには喜助の態度が考えれば考える程わからなくなるのである。

暫くして、庄兵衛はこらえ切れなくなって呼び掛けた。「喜助。お前何を思っているのか。」

「はい」といってあたりを見廻した喜助は、何事をお役人に見咎められたのではないかと気遣うらしく、居ずまいを直して庄兵衛の気色を伺った。

庄兵衛は自分が突然問を發した動機を明して、役目を離れた応対を求める分疏をしないでならぬように感じた。そこでこういった。「いや。別にわけがあつて聞いたのではない。実は、己は先刻からお前の島へ往く心持が聞いて見たかつたのだ。己はこれま

で此舟で大勢の人を島へ送った。それは随分いろいろな身の上の人だったが、どれも島へ往くのを悲しがつて、見送りに来て、一しよに舟に乗る親類のものと、夜どおし泣くに極まつていた。それにお前の様子を見れば、どうも島へ往くのを苦にしてはいないようだ。一体お前はどう思っているのだい。」

喜助はにつこり笑った。「御親切に仰やつて下さつて、難有うございます。なる程島へ往くということは、外の人には悲しい事でございましょう。其心持はわたくしにも思い遣つて見ることが出来ます。しかしそれは世間で樂をしていた人だからでございませう。京都は結構な土地ではございますが、その結構な土地で、これまでわたくしのいたして参つたような苦みは、どこへ参つてもなからうと存じます。お上のお慈悲で、命を助けて島へ遣つて下さいます。島はよしやつらい所でも、鬼の栖む所ではございませうまい。わたくしはこれまで、どこといつて自分のいて好い所というものがございませうでした。こんどお上で島にいろと仰やつて下さいます。そのいろと仰やる所に落ち著いていることが出来ますのが、先づ何よりも難有い事でございます。それにわたくしはこんなにか